

## 第56回試験研究成果発表会（果樹Ⅱ）発表概要

【日時】平成31年1月25日（金）13:30～16:20

【会場】農林総合研究センター 暖地園芸研究所（館山市山本1762）

### 発表1 情報提供（13:40～14:00）

新たな改植技術でビワの初期収量アップ！

－盛土式客土法の開発－

特産果樹研究室 蔦木 康德

ビワ産地では、老木の割合が増加しており、改植が行われていますが、新たに植えた苗木に生育不良がみられることは少なくありません。そこで、生育不良を回避するため、植え付け時に盛土を行い、盛土部分の土を新土で客土する方法を開発しました。この方法により植えた苗木は、無客土（連作土で盛土）に比べて、初期生育が良好であり、初期収量が多いことも明らかになりましたのでご紹介します。



盛土式客土により植えたビワ苗木

### 発表2 成果発表（14:00～14:25）

温水を使ったビワ白紋羽病の新しい治療技術

生物工学研究室 高橋 真秀

近年、白紋羽病によるビワの枯死が頻発しています。白紋羽病対策としては、ナシ等を対象に50℃の温水を使った治療技術が実用化されていますが、ビワは熱に弱いことから障害がでる恐れがありました。そこで、ビワ台木の根部の熱耐性を明らかにするとともに、45℃の温水を用いて白紋羽病を治療する技術を開発しました。現地圃場において実施した実証試験の結果とあわせて紹介します。



温水を使ったビワ白紋羽病の治療

**発表3** 情報提供 (14:25~14:45)

ビワ果実の成熟と気温の関係

特産果樹研究室 蔦木 康徳

ビワの開花は秋冬期から始まり、その期間は低温に遭遇しやすく、低温時には果実の発育(成熟)が停滞します。このように果実の成熟と気温には密接な関係があると予想されますが、詳細は不明でした。そこで、過去のデータを解析することにより、果実の成熟に影響する気温を明らかにしたのでご紹介します。この関係を応用することにより、新たな収穫期予測法やハウスビワの収穫期をコントロールすることも可能と考えられます。



ビワ「富房」の果実

**発表4** 成果発表 (15:00~15:25)

マンゴー「アーウィン」の安定着果技術

特産果樹研究室 押田 正義

南房総地域では観光・直売向け品目としてマンゴー栽培が行われています。8月頃に収穫する作型が一般的ですが、西南暖地とは異なる作型であるため、独自の技術が必要です。そこで、マンゴー「アーウィン」について、温度管理と果実品質との関係や、安定着果技術について試験を行いましたので、その結果を紹介します。



マンゴー「アーウィン」の栽培状

**発表5** 成果発表 (15:25~15:50)

パッションフルーツの加温施設7~8月収穫作型及び無加温施設11~12月収穫作型

特産果樹研究室 押田 正義

近年栽培が盛んになっているパッションフルーツは、無加温施設栽培や露地栽培では収穫盛期が9月頃で、観光客が多い7月~8月上旬には収穫が間に合いません。そこで、加温施設でこの期間に多く収穫できる作型を開発しました。また、無加温施設で、主要産地からの出荷が少なく市場での高単価が見込まれる11~12月に収穫する作型についても開発しましたので、併せて紹介します。



パッションフルーツの施設栽培

**発表6** 成果発表 (15:50~16:15)

南房総地域に適するレモン品種の選定

特産果樹研究室 小野瀬 優哉

レモン4品種について、露地及び無加温施設栽培において品種特性を比較検討しました。露地栽培では樹体生育が良く、早期成園化につながる「リスボン」が適します。無加温施設栽培では樹勢が落ち着き、収量が多く果実品質が良い「アレンユーレカ」が適します。かいはよう病は、露地栽培においていずれの品種でも発症し、対策として防風網等の風よけが必要になります。



レモン「リスボン」の果実